

## 「龍谷の森」里山保全の会 2021年度活動報告

「龍谷の森」里山保全の会・副代表世話人 龍谷大学理工学部・実験講師  
里山学研究センター・副センター長

林 珠乃

「龍谷の森」里山保全の会・代表世話人 龍谷大学理工学部・教授  
里山学研究センター・研究員

宮浦 富保

「龍谷の森」里山保全の会・副代表世話人 龍谷大学政策学部・准教授  
里山学研究センター・研究員

谷垣 岳人

2021年度の「龍谷の森」里山保全の会は、2020年度に引き続き新型コロナウイルスの感染予防に努めながら、毎月第二土曜日に定例活動を実施した。緊急事態宣言の発令中や滋賀県内で感染者数が増加している時期は活動を中止した。対面での総会は中止し、2020年度の活動報告と会計報告を会員に郵送することで総会とした。12月にはニュースレターを発行した。

| 活動日         | 活動内容           |
|-------------|----------------|
| 2021年5月8日   | 薪づくり、林道整備      |
| 2021年6月12日  | 林道整備、草刈り       |
| 2021年7月10日  | 林道整備、灌木整理      |
| 2021年8月     | 中止             |
| 2021年9月     | 中止             |
| 2021年10月9日  | 草刈り、林の整備作業     |
| 2021年11月13日 | 林道整備、薪作り、薪引き渡し |
| 2021年12月11日 | コナラ等の伐採        |
| 2022年1月     | 中止             |

# 「龍谷の森」 里山保全の会ニュースレター

2021年12月23日発行 第5号

## ナラ枯れによる植生へのインパクト

今回は、亀元翔太さんの2019年度の卒業研究「ナラ枯れに伴うコナラ二次林の植生変化」の内容をご紹介します。宮浦研究室の卒業生が、2005年以来「龍谷の森」のコナラ二次林で継続してきた植生調査の結果をまとめたものです。

図1は、2005年から2019年までの個体数の変化を、コナラとそれ以外の樹種に分けて示したものです。龍谷の森での最初のナラ枯れは2010年に確認されています。その後、2015年までコナラの個体数密度の減少が続いています。コナラ二次林では、コナラが最も優占していました。ナラ枯れにより大きなコナラが枯死しました。枯死したコナラが倒れることで、近くの他の樹種も巻き添えになり、コナラ以外の樹種の個体数密度の減少が起きました。2015年以降は、コナラの枯死が確認されていません。優占樹種であるコナラが枯死したことで、コナラ二次林には明るい環境が作り出されました。2015年以降は、コナラ以外の樹種の個体数密度が急激に増加しています。特に増加が目立っていたのは、クロバイ、ヒサカキ、タカノヅメなどです。

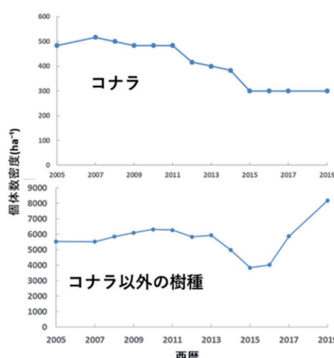


図1. 個体数密度の変化

図2は、推定された地上部バイオマスの変化を、コナラとそれ以外の樹種に分けて示したものです。コナラの枯死が2011年に始まっていますが、バイオマスの減少は少し遅れて2014～2015年にみられます。ナラ枯れの初期には、それほど大きくないコナラが枯死し、生存しているコナラのバイオマス増加のために減少分が相殺されていたものと思われる。ナラ枯れ以前には、コナラ以外の樹種のバイオマスは減少傾向にありましたが、ナラ枯れの後、コナラ以外の樹種は、急速にバイオマスを増やしています。特にバイオマス増加が大きかったのは、クロバイとシアブラでした。

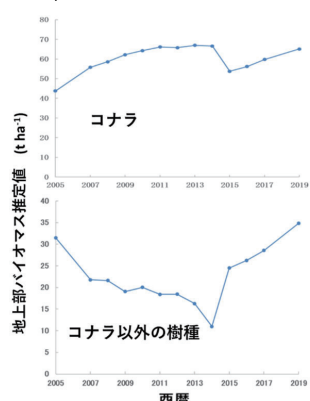


図2. 地上部バイオマス推定値の変化

現在の「龍谷の森」では、ナラ枯れ被害はほとんど認められません。しかし、ナラ枯れ以後、森の種組成は大きく変化しつつあります。この森がどのように変化していくのか、今後も見守り続けていきたいと思っています。(宮浦富保)

2021年度の総会は、2020年度の会計報告と活動報告の送付によって実施させていただきます。質問等ありましたら林までお寄せください。

2021年度会費の納入をお願いいたします。

## 俳句に見る里山の冬のいとなみ

毎日放送の番組「プレバト」での夏井いつきさんのコーナーの人気をきっかけにして、最近は俳句がブームであるようです。新型コロナウイルスの蔓延により移動が制限されている中で、身近な自然や暮らしに目を向けて十七文字を紡ぎだすことに楽しみを見出している方も多いようです。

俳句は、五七五の十七音の調に季語を詠み込むことを特徴としています。季語には、その季節に特徴的な生活史を持った生物の名前だけでなく、季節を彩る暮らしに関する言葉も含まれます。里山に暮らす生き物や里山での人々の営みを表す言葉も季語に採用されています。今回は、里山の自然や暮らしに係る冬の季語を含む俳句をいくつか紹介しようと思います。

山すこし片附けると炭を焼く 後藤比奈夫  
炭焼の炭俵（すこ）に伏せある湯呑かな 宮城さよなみ  
炭焼に飼はれて犬の煤け貌 西村しげ子

「炭焼」は冬の季語です。農家の人々が冬の稼ぎとして炭を焼くことが多かったことから、冬の季語になったようです。ナラやカンなどの山の広葉樹を切り倒し、炭竈に詰めて蒸し焼きにすると炭が出来上がります。「山すこし…」の句には、木を切り倒してすこすっきりした里山の風景や、熟練した炭焼の小気味よい働きぶりが詠み込まれているようです。「炭焼の炭俵に…」や「…犬の煤け貌」の句からは、炭を焼く生活が匂い立つようです。炭焼の顔も手も、蒲団も湯呑も生活のすべてに真っ黒な炭の粉がまわりついているのです。とどめは呑気な犬の顔です。

里山の広葉樹は秋になると葉を落とします。里山に暮らす人々は、山の落葉を田や畑に鋤き込み肥料として使っていました。山の落葉を集める作業を「落葉掻（おちばかき）」、落葉を入れる籠を「落葉籠」といいますが、これらは冬の季語「落葉」の傍題となっています。

山土の掻けば香にたつ落葉かな 飯田蛇笏  
落葉掻く音の一人の加はりし 岸田稚魚  
落葉籠児にも負はして先立たせ 野村泊月  
落葉籠日雀の声も入れて来し 原ちあき

化学肥料が普及する前までは落葉は農家にとって大切な資源であったので、それを集める落葉掻にはおのづかが入ったものでしょう。「山土の…」の句からは、土が露になるまで落葉を掻く様子や、黒々とした土が現れると同時に立ち上がる土と落葉の入り混じった香りを感じ取ることができます。一方で、このように土まで掻いてしまうことは、山の資源の過剰な収奪となり、はげ山や松林などの植生を導いたことも知られています。

よく乾いた落葉を熊手などで寄せ集めると、大きなほどにぎやかな音が立ちます。落葉を掻く人の姿は見えなくても、落葉の音が仕事を伝えてくれます。生き生きとした落葉掻の音と山のそこそこで働く人の様子を「落葉掻く音の…」の句は伝えてくれます。

乾いた落葉は軽いものですが、たくさん集めると嵩張ります。ですから、落葉籠はとても大きく、直径1mほどのものもあります。一家総出で落葉を集め、子供にも籠を背負わせて先に家に帰す風景を野村抱月の句は描いています。子の背負う籠は、背丈ほどもある大きなものだったことでしょう。その落葉籠は、落葉だけでなく、里山で囀っていた小鳥の声や山仕事をしながらのおしゃべりや笑い声でいっぱいになっているのです。

「龍谷の森」里山保全の会は、会の設立当初から森の落葉を集めて落葉堆肥作りに取り組んでいます。落葉籠ならぬ落葉バッグいっぱい落葉を集めて堆肥穴に入れ、上から踏み固める作業はなかなか楽しいものです。一年ほどして出来上がった堆肥は、会員の皆さんの家庭菜園やベランダ園芸で使われているだけでなく、ここ数年は龍谷大学の農業サークルの皆さんの畑でも活躍しています。

自分で体験し、五感を使って季節を観察することで良い俳句は生まれると言われています。「龍谷の森」里山保全の会の活動から多彩な俳句が詠まれますと楽しいですね！（林珠乃）

## 今後の活動予定

「龍谷の森」里山保全の会では、毎月第二土曜日に定例活動を行っています。1月は変則的に第三土曜日に実施します。

2022年1月15日 9時30分から12時くらいまで 落葉掻と落葉堆肥の掘り出し  
新型コロナウイルスの感染拡大の状況や天候に応じて中止になる場合があります。実施については林(tamano@rins.ryukoku.ac.jp, 090-9715-0351)にお問い合わせください。